

平成22年 5月 31日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）  
 研究期間：2008～2009  
 課題番号：20890293  
 研究課題名（和文）精神病様症状体験児童の追跡転帰研究

研究課題名（英文）A prospective follow up study of adolescents with psychotic like experiences

研究代表者

西田 淳志 (NISHIDA ATSUSHI)

財団法人東京都医学研究機構・東京都精神医学総合研究所・研究員

研究者番号：20510598

研究成果の概要（和文）：幻覚や妄想様の症状（精神病様症状）を経験している思春期児童（地域標本 254 名の 7.3%）を 12 ヶ月間縦断的に追跡した結果、その 18.2～19.0%が持続体験群に該当することが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：Adolescents with psychotic-like experiences (7.3% of the community sample) were prospectively followed up during 12 months, and around 20 % of them reported psychotic-like experiences at the outcome survey.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,340,000	402,000	1,742,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,540,000	762,000	3,302,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：精神神経科学

キーワード：精神病様書状体験、追跡研究、早期介入、前駆期、統合失調症、病前特徴

#### 1. 研究開始当初の背景

近年、ニュージーランドの出生コホート研究によって、(I) 幻覚や妄想などの精神病様症状体験(Psychotic-like experiences: PLEs)を有する子どもが一般人口中に 14%程度存在すること、(II) 11 歳時の PLEs が成人期以降の統合失調症様障害と関連し、特に、強めの症状を体験していた児童の一群（全体の

1.6%）については、26 歳時点でその 25%が統合失調症を発症し (odds ratio, 16.4)、90%に引きこもりや就労困難などの社会機能上の問題が認められることが報告されている (Poulton et al, 2000. Arch Gen Psychiatry)。

また、精神病前駆状態 (At Risk Mental State; ARMS) のハイリスク者を対象とした近年の追跡研究においても、早期から PLEs

を有する一群が存在し、その群の精神病移行率（発症率）が他の群（青年期や成人期以降に PLEs をはじめて体験した群）に比べ有意に高いことが報告されている（Amminger et al, 2006. *Schizophr Res*）。

この思春期早期 PLEs は、これまで報告されてきた他の統合失調症リスク要因（遺伝因を除く）と比べて odds ratio が最も高く、早期支援・治療の対象症状として有望であり、その後の統合失調症を含む思春期・青年期の精神病理や社会機能障害を防止・軽減するための有力な標的・目安であると考えられる。

我々は、これまでに三重県津市において国際的に最大規模の 10 代早期一般人標本（5,000 名以上：12～15 歳）を対象とした PLEs に関する横断的疫学調査を実施し、(1) 約 15% の思春期児童に PLEs が認められ、(2) かかる子どもたちは、不安や抑うつが強く、希死念慮が多く、音に過敏で寝つきや集中が困難であり、アルコールや薬物使用、いじめられたりいじめたりしていること、同居中の大人から暴力を受けていることなどが有意に多いことを明らかにした（Nishida et al., *Schizophr Res*, 99: 125-133, 2008）。すなわち、PLEs は、思春期一般人口標本中に広く分布しており、かかる体験を有する生徒の多くがすでに様々な精神保健的問題を抱えていることが示唆された。

## 2. 研究の目的

こうした PLEs を体験し、かつ、他の様々な精神保健問題を抱えている思春期児童のうち、さらにどのような特徴を有する個体が発症の可能性が高いのかを検証することが、

予防的戦略を構築するうえで重要と考えられる。

近年、諸外国において行われている ARMS 研究によって、PLEs を持続的に経験している者は、一時的に経験している者に比べて、その後、精神病を発症する可能性が高いことが報告されている（Domiguez et al, 2009. *Psychological Medicine*）。また、苦痛感（distress）を伴う PLEs は、伴わない PLEs に比べ、後の発症可能性が高いことが報告されている（Yung et al, 2004. *Schizophrenia Research*）。

本研究では、日本人の思春期一般人口標本を縦断的に追跡し、PLEs を持続して経験している者の頻度を明らかにする。また、ベースライン調査時点で、苦痛感を伴う PLEs を体験している群における PLEs 持続率についても検証する。

## 3. 研究の方法

東海地区のある地方都市の教育委員会ならびに調査協力校の協力を得て、思春期の中学生約 250 名を 12 ヶ月間縦断的に追跡し、PLEs を持続して体験している者の頻度、およびその特徴についての検討を行った。調査協力校の中学 1・2 年生を対象として平成 20 年 12 月にベースライン調査を実施し、12 ヶ月後の平成 21 年 12 月に転帰調査を行った。

ベースライン調査時の調査協力率は 97% であり、261 名から有効回答が得られた。12 ヶ月後の追跡調査時においては、ベースライン調査時に有効回答が得られている 261 名のうち 254 名の有効回答が得られた（追跡率 97.3%）。いずれも無記名質問紙法によって行

った。PLEs は、ニュージーランド出生コホート研究で用いられた 4 項目を使用した (Paulton et al, 2000; Nishida et al, 2008)。また、PLEs の各項目について、そうした体験が苦痛感を伴うものであったか、否かについても尋ねている。

ベースライン調査時の PLEs が、12 ヶ月後の PLEs を有意に予測するか否かを検証した。また、ベースライン調査時に PLEs を報告した者のうち、どの程度が 12 ヶ月後においても PLEs を体験しているかを確認する。

本研究は、東京都精神医学総合研究所研究倫理委員会において承認を受け、実施している。

#### 4. 研究成果

過去 6 ヶ月間に PLEs を体験していた生徒はベースライン調査時では 7.3%、転帰調査時では 8.3% 存在した。ベースライン時の PLEs は、12 ヶ月後の転帰調査時の PLEs を有意に予測した (OR=3.7 95%CI 1.1-12.4) (持続群 18.2%)。さらにベースライン時の「苦痛感を伴う」PLEs は、12 ヶ月後の「苦痛感を伴う」PLEs を高率に予測した (OR=5.8 95%CI 1.1-30.7) (持続群 19.0%)。以上の結果から、過去 6 ヶ月間に PLEs を体験している思春期児童、特に「苦痛感を伴う」PLEs を体験している思春期児童は、12 ヶ月後も PLEs を持続的に体験しているリスクが有意に高いことが示唆された。また、ベースライン調査時に PLEs を報告していた生徒の 18.2% が追跡調査時においても持続して PLEs を報告した。また、ベースライン調査

時点で「苦痛感を伴う」PLEs を体験していた生徒のうち 19.0% が、追跡調査時点においても PLEs を体験していることが明らかとなった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① Oshima N, Nishida A, Fukushima M, Shimodera S, Kasai K, Okazaki Y, Sasaki T. Psychotic-like experiences (PLEs) and mental health status in twin and singlestone Japanese high school students. *Early Intervention in Psychiatry*, 査読有、in press
- ② Nishida A, Sasaki T, Nishimura Y, Tanii H, Hara N, Inoue K, Takami T, Yamada T, Shimodera S, Itokawa M, Asukai N, Okazaki Y. Psychotic-like experiences are associated with suicidal feeling and deliberate self-harm behaviors in adolescents age 12-15 years. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 査読有、121: 301-307, 2010.
- ③ Imamura A, Nishida A, Nakazawa N, Shimodera S, Tanaka G, Kinoshita H, Ozawa H, Okazaki Y. Effects of cellular phone e-mail use on the mental health of junior high school students in Japan. *Psychiatry and Clinical Neuroscience*, 査読有、63: 703-703, 2009.
- ④ Nishida A, Sasaki T, Harada S, Fukuda M, Ikebuchi E, Masui K, Nishimura Y, Okazaki Y. Risk of developing schizophrenia among Japanese high-risk offspring of an affected

parent: outcome of a twenty-three-year follow-up. *Psychiatry and Clinical Neuroscience*, 査読有、63: 88-93, 2009.

〔学会発表〕(計7件)

- ① 西田淳志、思春期・青年期の精神病様症状体験と前駆症状、第25回日本ストレス学会(教育講演)2009年12月4日、横浜開港記念館
- ② 西田淳志、地域移行・地域支援の時代に精神科医はどう向き合うのか: 英国の地域支援の動向・成果・課題: 第105回日本精神神経学会学術総会、2009年8月23日、神戸国際会議場
- ③ 西田淳志、早期介入とは、何を指し、何を実践することなのか?: 各国での取り組みからの示唆、第9回日本外来精神医療学会、2009年8月8日、大阪国際会議場
- ④ 下寺信次, 藤田博一, 諸隈一平, 上村直人, 井上新平, 西田淳志、思春期の精神病理: 高知県からの報告、第28回日本社会精神医学会、2009年2月28日、宇都宮
- ⑤ 今村明, 中澤紀子, 西田淳志, 岡崎祐士, 小澤寛樹、長崎市の中学生を対象とした精神病様症状体験の調査、第28回日本社会精神医学会、2009年2月28日宇都宮
- ⑥ 西田淳志, 下寺信次, 佐々木司, 今村明, 野中猛, 今村義博, 谷井久志, 西村幸香, 岡崎祐士、思春期・青年期一般人口中の精神病様症状体験(PLEs)と主観的苦痛及びHelp-Seekingとの関連、第28回日本社会精神医学会、2009年2月28日、宇都宮
- ⑦ 岡崎祐士, 西田淳志, 佐々木司, 原田誠一, 福田正人、統合失調症の未病に見られる症状、第4回日本統合失調症学会、2009年1月31日、吹田

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

西田 淳志 (NISHIDA ATSUSHI)  
財団法人東京都医学研究機構・東京都精神医学総合研究所・研究員  
研究者番号: 20510598

### (2) 研究分担者 なし